寸感抄

中村重義

悦びは天の果てより来たるらし白菊咲けり朝(あした)の庭に

野菊の花一輪摘みて供華とせり十九の友の殉職の碑に

早春の野を越えて来し安らぎか友の便りの如き風吹く

教員免許遂に生かせず終るかとほろ苦く噛む甘柑一顆

噴水が微妙に高さ変えている土曜の午後のお子様広場

亡き父の貌もあるかと尋ね行く五百羅漢の苔むす面輪

明暗を分かちて昏るる夜の街この寂しさは何処より来る

コロナとう禍いいつまで続くかと思いつつ朝の珈琲すする